# 生きるということ

佐多稲子

文藝春秋新社

生きるということ

昭和四十年三月二十五日発行

定価 三九〇円

著者 佐多稲子

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
電話 東京(571)三一四一
振替 東京七八七四三

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社　製本・中島製本所

© I. SATA 1965 Printed in Japan

# 生きるということ・目次

## 生きてきた道


不気味な偶然……9
夢のつながり……13
目は開かれず、重圧だけがあった……17
『空想より科学へ』……21
下町のひとびと……24
終戦日前後の思い出……31
テープと鏡……34


## 自分という存在


写真のことなどから……39
新しい眼鏡のこと……43
三分間の経験……48
頭の中の論争……52
自分について……55


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品のなかの私……62

## 生きるという営み

持ち味……79
お酒のことなど……82
女の酔い……85
卓抜な仕つけ……89
新しい女らしさ……93
女らしい怒り……96
男らしさと女らしさ……99
湿地帯の狩人たち……102
愛の悩みがもたらしたもの……106
結婚三年目の実際……113
結婚の失敗に気づくとき……121

## 文学のなかの女性像

『可愛い女』のオーレンカ……129
『愛の妖精』のファデット……132
『伸子』……135
『縮図』の銀子……138
『アンナ・カレーニナ』……141
『女の一生』のジャンヌ……144
『虞美人草』の藤尾……147
『或る女』の葉子……149
『楡の木蔭の欲情』のアビー……152
『あらくれ』のお島……155
『にごりえ』のお力……163
『裲襠』のすず、たつ、琴路……170

## 社会とともに生きる

警職法案について……179
皇太子妃決定におもう……185
東京の誇りについて……191
ＮＨＫの君が代……197
みんな子供を持っている……199
美智子さんの国民葬に思う……203
市民の立場で――嶋中事件について――……206
松川無罪確定の後……211
このごろ思うこと……220
私の一九六四年……223
あとがき……226

裝幀　朝倉摂

# 生きてきた道

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

# 不気味な偶然

私はこれから書き出すことを今までまだどこにも書いていない。どう書きようもないみたいなことでもあり、書かねばならぬことでもなかったからだろう。が、事実は小説よりも奇なり、ということで書くこの話は、私にとってはそう軽い話ではない。私の作品集が出たときその第五巻の月報に、友人のNが少しこの事実に触れて次のように書いている。

「そのころ、稲子さんは、丸善で模範店員だった。一人の青年が、その模範店員と結婚をした。僕の父親が、その青年の後見人をしていた。その青年は慶応の学生だった。

〝学生のくせに、結婚をするなんて、けしからん〟

僕の父親は、そう言って、おこっていた。

しかし、結局、二人は夫婦になった。

その後、僕の父親は、事業に失敗して破産を宣告された。その青年の死んだ父親から委託されていた財産も、その時、失われてしまった。

これが、その若い夫婦が心中をしようとするに至った全部の原因ではないまでも、重要な原因の一つになっていたと思う。

そのころ、稲子さんは、目黒不動の裏門のそばに住んでいた。屋根にペンキを塗った小さな文化住宅の中の一つだった。心中が未遂に終った、その翌日、僕は、その家の入口まで行った。しかし、中には入らないで帰ってしまった」

私の最初の結婚の不幸な出来事がここに要約されている。勤め先の重役が仲人に立っての見合結婚は、この出来事のあと結局破れた。辛うじて命助かり、無事に出産して赤子を抱くと、この子もあの暗い家には渡さぬと、勢込んでまた私は働き出した。働き出した場所は、今まで一と何のつながりもない場所であった。私は初めてのように生き生きとなっていて、自然に花がひらくように恋をした。私たちの恋は、対手の友人たちの若い好意にとり巻かれて、いささかのじぐざぐのあと結婚生活にはいった。まわりで援助をし、わが事のように一生懸命になってくれた友人の中のひとりが、Nという姓名だとしても、何を私が知ろう。

Nという名、それは最初の結婚生活の暗い毎日に、始終、呪うようにして聞かされていた名であるとしても、同じ姓はいくらもあること、私の新しい生活の仕合せに、以前の暗い話など結びつくはずもなかった。月日こそまだ二年ぐらいしか経過していなかったし、私の離籍はまだ手続きが終っていなかった。が、私にはもうその過去は遠いことのような気がしていた。

が、そのうち私は、新しい生活で夫から、そのNの父親のうわさなどを聞くにつれて、おもわず、自分が何か目に見えぬ運命の糸にあやつられているのではないか、と、目を見据えるよ

うなおもいになったのである。

はじめの結婚のとき、後見人のNという男に財産上の痛手を受けたということで、Nのことは憎悪をもって語られ、行方を探していた。私自身は知らぬことなのに、財産のことで神経衰弱になっていた若い当主は、妻である私をも、Nのまわし者ではないか、とあるときは疑うことさえあった。が、私自身はそのNという後見人には逢ったこともなかったし、そこで話を聞くだけであった。このようにして私の初めの結婚生活中に、後見人のNという存在は、「その若い夫婦が心中をしようとするに至った全部の原因ではないまでも、重要な原因の一つになっていたと思う」と、言うこともできよう。

新しい人生に再出発して、仕合せを持った私のそばに、もっとも親しい友人として今、若いNがいる。そしてこのNが、私の脱出してきた二年前の生活の中で重要な、しかも憎悪の関係で聞かされていた後見人のNと父子であるという偶然のまわり合せ、これは何と解釈していいのか、ただ私はこの不思議をくり返して言うばかりであった。二年前私の自殺未遂の翌朝、新聞で知って見舞いに来た後見人のNを、まだ、もうろうとした意識のまま、ちらと見たのを覚えている。「では、若奥様に御挨拶を」と、そのとき言った太い声、大柄な姿、それらが若いNと似ている。それはもうまちがいない。私があんまり呆然となってその不思議をくり返すので、ついに夫が声を荒くした。

「Nは僕の親しい友人であるということにつきる。そのほかの何でもない。以前の生活なんぞにからませるな」

全く若いNと私たちとは親しい友人であるということにつきている。その父親のNと以前の私の結婚生活と、それが今、どのようにつながっているのだろう。私の新しい結婚は、全く別の場所で、むしろ以前を絶ち切ったところで成り立ったもので、そこにつながりの見つけられる要因は何ひとつありはしないのであった。広い東京の中でどこでこの偶然が私の身にからまったのであろう。運命の糸を感じるしかないことだ。友人のNもあとになってこの事実を知って、複雑なおもいをしたらしいが、おたがいはこのことについてどちらもほとんど語り合わなかった。彼が、私の自殺が未遂に終ったその翌日、私の家の前まで父親のNと一緒にきたことさえ、三十数年後の彼の文章ではじめて私の知ることだった。私はまだしも再婚の相手がNその人でなかったことで運命論者にならずにいられる。が、それにしても私はこの偶然を、やはり不気味におもわざるを得ない。こういう偶然は、小説にも書けはしないのである。

# 夢のつながり

いまでもときどきおもい出す。偶然というにしろ、それが続くともう偶然とは思えなかった。それに夢につながるところが不思議だった。

はたちの夏であった。私は日本橋の大きな書店につとめていて、本所曳舟の自宅から通っていたが、三年続いた勤めにあきて厭世的になり、毎日死ぬことばかり考えているようなときだった。ある日、いつものように店に立っていると、長いこと病気で欠勤していた女友だちがひょっこりやってきた。体はもういいのかと聞くと、来月からでも出勤するつもりでそのことできた、という。彼女は胸を病んでいたから私は少々彼女のために不安に思った。そしておもい出した。昨夜、彼女の夢を見たことを……。夢で彼女の病気は悪化していて、その見舞いに私はいったのだ。昨夜、ちょうどあなたの夢を見た、といったものの、私はそれがどういう夢だったかはいわなかった。私はよく夢をみる。だから格別この夢を気にしたわけでもなかった。

その夜も私は夢をみた。こんどは近所で親しくしている家の主人で、この人はふだんは旅ま

わりの劇団について地方をまわっていた。夢の中でその人は舞台で義太夫を語っていた。留守宅とは親しかったけれど、ふだん留守がちのその小父さんと私は格別夢にみるほど親しかったわけではない。夢の中でその人が義太夫を語ると、カタッ、カタッ、と拍子木の音がしていた。舞台では明智光秀が竹やぶのうしろからあらわれ出でるところだった。私はああ、あの小父さんは興行師ということだが、本当は義太夫語りなんだな、とおもって見ていた。

次の朝、私が家を出たときだ。その人が古びた四角なトランクを下げて路地へはいってくる。

「あら、小父さん、おかえんなさい」

と私はいい、夢をおもい出した。義太夫を語っていた夢の中の顔が、陽やけした現実のその人の顔にまざまざと重なった。私はこのとき、昨夜の夢とけさの出会いの偶然をちょっと心にとめた。

三日目の夜は、三年前に私が上野の料亭に働いているときの年上の朋輩の夢を見た。おせきさんといい、いつも素顔で身ごなしのきりきりと粋な人であった。この料亭のお帳場さんといっしょになって店をやめた。下町かたぎの口やかましいお帳場さんだったが、おせきさんとは似合いであったろう。私も間もなくその家をやめいまの生活に変って、おせきさんのことはもう忘れていた。

夢の中でおせきさんはお帳場さんの肩をもんでいた。三年前、ときどきおせきさんはこんなふうにお帳場さんの肩をもんでやっていたものだ。それが夢に出てきた。

そして次の朝、私はこの夢をおもい出すと、三年前に別れたおせきさんの夢だから、けさそ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com